

## 梵天・帝釈天の「着装」について

（着袈裟像を中心に）

\*  
長 井 雅 雄

### 要 旨

従来、梵天・帝釈天像の尊像名比定においては、着甲の有無に着目することが多い。帝釈天の出自が武勇神であることから武装していることが自然であるとし、東大寺法華堂や唐招提寺金堂の梵天・帝釈天は尊像名が逆転していると指摘されている。

本論では、梵天・帝釈天の一尊が袈裟を着けるという他の天部像にはほとんど認められない特徴に着目した。尊像の着ける各種の衣や甲などの装備のうち袈裟、甲といった点に注目し、奈良時代から鎌倉時代までの作品を確認した。結果として、奈良時代の作品は袈裟を着ける像を梵天と考えること、中世においては着装自体が多様化し、着装と尊像名との関連も複雑になることを示した。平安時代に密教とともに請来された梵釈像を表す図像において、しばしば着甲像が帝釈天として規定・表現されていることがそれらの一因である可能性を指摘した。

キーワード：梵天 帝釈天 袈裟 着甲

### はじめに

従来、梵天・帝釈天像の尊像名比定においては、着甲の有無に着目することが多い。よく知られたところでは東大寺法華堂の梵天・帝釈天について、古くは昭和八年刊行の『東大寺大鏡』に「東方のものを梵天と呼んでいるが衲衣の下に甲を着けて居るのでこの方が帝釈天であるかにも思はれる」<sup>①</sup>とし、伝世尊像名に疑義が提示された。昭和四十三年の『奈良六大寺大観 東大寺 二』<sup>②</sup>においては井上正氏によってその説がより明確に論じられ、広く知られるようになり今日に至っている。本論では梵天・帝釈天として伝わる像容に対し、甲だけでなく尊像の着ける各種の衣まで含めた着装にまで視野を広げて若干の考察をしたい。ここで言う「着装」とは尊像の着ける各種の衣や甲などの装備を指すこととする。

着衣の用語に関して、天部像にはしばしば中国的な着衣が見られるが、その名称については時代によって寛衣、唐服、襦襦衣、中国的礼

服などと統一がない。本論では梵天・帝釈天の着装の特徴として「長袂衣」を着ける点に着目し、この語をもって表記する。また、「袈裟」という言葉は、ここでは体に纏う方形の布の着衣、五条袈裟、七条袈裟、九条袈裟などの狭義の意で用いる。

また、現呼称の尊像名と本論で指摘する尊像名に食い違いが起こることがあり、煩雑を避けるために、以下の記述では現呼称については右肩に「\*」を付ける。

## 第一章 尊像名に関する研究史

前述のとおり、奈良時代の梵天・帝釈天像については、伝世する尊像名に対して問題提起がなされている。まず、東大寺法華堂梵天・帝釈天像について、『奈良六大寺大観 東大寺 二』の同項の注において、井上正氏は次のように述べておられる。

『東大寺大鏡』第二、三月堂篇（昭和九年大塚巧芸社）、および『国宝』（昭和三十八年毎日新聞社）では、着甲の左方像を帝釈天像とし、右方の非武装像を梵天像としている。本来、帝釈天はヴェーダ神話に出てくるインドラ神で、アーリア人の理想とする戦士の姿を神格化した武勇神である。一方、梵天は帝釈天とともに、後に仏教に取り入れられて護法神となっているが、本来は抽象概念たる世界創造の最高原理「梵」に人格をあたえて神格化さ

れた神であるから、二体のうち、一体が武装の場合は武装像を帝釈天とする方が自然であろう。

つまり、東大寺法華堂梵天は甲を着けている（武装している）ため帝釈天とし、着けていない帝釈天を梵天とするのが自然であったとした。その上で、「戒壇院厨子扉絵（写本）や、本像のように左方像だけが武装している時は（中略）、これを帝釈天としてよからう。」とされている。

戒壇院厨子扉絵は旧来、扠子を持ち着甲するのが梵天、団扇を執り着甲しないのが帝釈天とされてきた。たとえば、佐和隆研氏は、一九六二年刊行の『仏像図典』において「戒壇院厨子のそれ（梵天）扠子を持ち」、「（帝釈天は）唐扇をとり」とされ、関根俊一氏は「戒壇院厨子扉絵の写本にも扠子を執る像があるが、この像は着甲像であり、旧来、帝釈天とされてきた団扇を執る像が梵天像とみられる」（傍点筆者）とされる。

唐招提寺金堂梵天・帝釈天像については『奈良六大寺大観 唐招提寺 二』の同項の注において、上原昭一氏が次のように述べておられる。<sup>5)</sup>

東大寺法華堂の梵天二天像は、向って右方の甲の上に袈裟を着けているものを帝釈天、左方の甲を着けず寛衣を着るものを梵天と解している。本像はともに甲を着けるが、その上に袈裟を着け

たものを帝釈天、寛衣を着けたものを梵天と解すれば、現呼称を逆にした方が自然とも考えられよう。

唐招提寺の梵天・帝釈天は両者とも甲を着けているが、梵天の甲、袈裟という着装は、東大寺の梵天と同じ着装であつて、同一尊格と考えられる。先述のとおり東大寺の梵天は着甲ゆえに帝釈天と考えられたために唐招提寺梵天・帝釈天も名称が逆転しているとされる。

甲と袈裟を着ける像を帝釈天とする考えに従えば、同様に法隆寺旧食堂の梵天・帝釈天像も、ともに着甲し、梵天は甲の上に袈裟を着け、帝釈天は寛衣（長袂衣）を着けている。この点で、唐招提寺金堂の梵天・帝釈天像と同じである。つまり、法隆寺旧食堂梵天・帝釈天も現呼称を逆にした方が自然という事である。

つまり、井上正氏、上原昭一氏の考えによれば奈良時代の代表的な梵天帝釈天像の四例、すなわち東大寺法華堂梵天・帝釈天像、唐招提寺金堂梵天・帝釈天像、法隆寺旧食堂梵天・帝釈天像、東大寺戒壇院厨子扉絵梵天・帝釈天図において、尊像名が逆転しているという事になる。これらの説の影響は大きく、のちに出版された美術全集などで、東大寺、唐招提寺の梵天・帝釈天像の呼称の逆転について触れられるようになる<sup>6)</sup>。

しかし、東大寺法華堂、唐招提寺金堂、法隆寺旧食堂といった大寺の主要な堂宇ですべて尊像名が逆に伝わるといったことがあり得るのか。次章以降、「武装像の場合は帝釈天」という前提をひとまず外し、

梵天・帝釈天の着装、特に着袈裟に注目し、尊像名との関連を考察する。

## 第二章 奈良時代の着装

奈良時代の梵天・帝釈天の作例を現呼称、着装という観点から以下に整理した。なお、東大寺戒壇院厨子扉絵は、平安時代の写しであるが、オリジナルは天平勝宝七年（七五五）の作品であるため、奈良時代の作品の内に入れた。

また、東大寺法華堂旧安置の日光仏・月光仏像（現東大寺ミュージアム）は、従来、梵天・帝釈天とする他、声聞・縁覚に比定する説があつたが、近年の調査で法華堂の八角基壇に残る台座痕から東大寺戒壇院にある四天王像と共に安置されていたことが濃厚であることが判明したため、梵天・帝釈天として検討することとした。

第一章でとりあげた四例、すなわち東大寺法華堂（図1、2）、戒壇院厨子扉絵（図3、4）、唐招提寺金堂（図5、6）、法隆寺旧食堂（図7、8）の梵釈図像は、いずれも寺伝等で、左方像が梵天、右方像が帝釈天である。左方像は長袂衣、甲、袈裟であるのに対し、右方像は長袂衣を着し、甲は着けるものと着けないものがある。注目したのは左方像が袈裟を着けるという共通点である。長袂衣は天部像によく見られる着装であり、甲は仏の守護神としての性格を持つ天部像にはよく見られる。それに対して袈裟を着ける天部像というものは

とんど見られない。このことから、梵天・帝釈天像における着装の特徴は、片方の像が袈裟を着けることであると言える。さらに東大寺法華堂旧安置日光仏・月光仏像(図9、10)は長袂衣に片方が袈裟をつけるが、両者とも着甲していない点に注目したい。この時代の梵天・帝釈天については甲よりも袈裟が尊像の性格を決める要素であると言えよう。

となれば、二体のうち一体が武装像の場合は帝釈天であると考ええるより、袈裟を着けるものが梵天であると考えてよいのではないか。つまり疑義の呈された尊像名は伝世の通りとして良いのではないか。

先述の五例以外に奈良時代の像で梵天・帝釈天と考えられるものとして表1の6、11がある。正倉院漆仏龕扉絵は梵天と伝えられるが同時代の梵天の着装としては裙、条帛、天衣、瓔珞を着けている点で特異である。そのほかはいずれも後代の修補のため、当初の着装が不明なこと、出自が不明なことなどから考察の対象外とする。

### 第三章 平安時代の着装

平安時代は空海・最澄らのもたらした密教とともに、新たな梵天・帝釈天の図像(表1の12、19)が請来され、それを所依とした作品も盛んに制作される(表1の20、24)。このような新来の密教図像における梵天・帝釈天には複数の像容が見られるが、これらは袈裟や長袂衣といった奈良時代の着装と著しく異なるため、ひとまず本論にお

ける考察の対象外とする。しかし、あらためて後述するように、十天形像図や東寺講堂の帝釈天(図11)のように着甲し金剛杵を持つ姿の作品が現れたことが、奈良時代から踏襲されたいわば伝統的な像容に対し、何らかの影響を与えた可能性があるということを指摘しておく。また仁王経五方諸尊図の帝釈天(図12)は密教図像ではあるが、長袂衣を着けることで注意される。

密教図像に従った作品が盛んに制作される一方で、奈良時代の像容を襲った作品も引き続き制作される。次に、それらの作品の着装を確認する。

まずは対をなす梵天・帝釈天として捉えてよいと思われる像(必ずしも梵天・帝釈天として伝存していない像を含む)は、善水寺(梵天・帝釈天像)、秋篠寺(日光菩薩・月光菩薩像)、東大寺(俱舎曼荼羅図左方像・右方像)、唐招提寺(天部形像)・細見美術館所蔵(天部形像)、東京国立博物館(梵天・帝釈天像)、龍光院(屏風本尊像左方像・右方像)などがある(表1の25から30)。

これらは奈良時代以来の、両者とも長袂衣を着け片方が袈裟を纏う像であるが、尊像名は明確に伝わっていない。善水寺像は近時まで日光・月光菩薩像と呼ばれ<sup>8)</sup>、東京国立博物館像の現尊名の由来については詳らかでない。

例外として密教図像、奈良時代の像容、いずれにも基づかない作品として護国院(梵天・帝釈天像)、法隆寺(伝法堂旧像梵天・帝釈天



図4 東大寺戒壇院厨子  
扉絵右方像



図3 東大寺戒壇院厨  
子扉絵左方像



図2 東大寺法  
華堂帝釈天像



図1 東大寺法  
華堂梵天像



図8 法隆寺旧  
食堂帝釈天像



図7 法隆寺旧  
食堂梵天像



図6 唐招提寺  
金堂帝釈天像



図5 唐招提寺  
金堂梵天像



図12 東寺仁王經五方諸尊  
図・中央 帝釈天 部分



図11 東寺講堂 帝釈天  
像



図10 東大寺法  
華堂旧蔵伝月光  
菩薩像

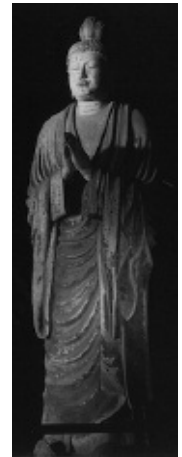


図9 東大寺法  
華堂旧蔵伝日光  
菩薩像

像)、唐招提寺(梵天像・帝釈天像)、がある(表1の31~33)。法隆寺、唐招提寺の作品は両者とも長袂衣を着けるといふ天部像にはよくある姿であるが、両者ともに袈裟を着けていないため、奈良時代の梵天・帝釈天の像容と異なる。護国院の作品は両者とも裙、条帛、天衣、璽瑠を着けるといふ菩薩形である。

単独像(梵天・帝釈天として伝わっていない像を含む)は、法雲寺(帝釈天像)、正法寺(帝釈天像)、平等院(帝釈天像)、常福寺(帝釈天像)、パークコレクシオン(帝釈天像)、大蔵寺(帝釈天像)、孝恩寺(帝釈天像)、室生寺(帝釈天像)、當麻寺(帝釈天像)、慈眼庵(天部像)などがある(表1の34~43)。

このうちパークコレクシオン像、當麻寺像は近時の尊名比定と思われる。これらが造像当初から単独像として造像されたかは不明である。これらに共通するのは長袂衣のみ、もしくはそれに甲を着けるといふことである。これらが奈良時代の像容に基づいたものかは不明であるが、奈良時代の梵天・帝釈天の着装との一致をみる。着甲しない像についてはあるいは仁王経五方諸尊図の帝釈天図に基づく像容である可能性も考えられる。慈眼庵の天部像(寺伝聖観音)は長袂衣、甲、袈裟という姿であり奈良時代の梵天・帝釈天の姿に近い。

#### 第四章 鎌倉時代の着装

平安時代に引き続き鎌倉時代には、密教図像はもとより、奈良時代

の像容に基づく作品の制作が行われる。密教図像による作品(表1の44~52)は平安時代の密教作品同様に、ここでの考察においては対象から外す。奈良時代の像容により制作された梵天・帝釈天と思われる作品は海住山寺(五重塔扉絵 左方像・右方像)、東京芸術大学(吉祥天厨子絵左方像・右方像)、興福寺(帝釈天像(梵天)・根津美術館 帝釈天像)、妙法院(二十八部衆像梵天・帝釈天像)、京都国立博物館(興福寺曼荼羅図の東金堂左方像・右方像)、藤田美術館(八角舍利殿扉絵左方像・右方像)、東京国立博物館(十六善神像の左方像・右方像)、興福寺(護法善神像梵天王・帝釈天像)、東福寺(板絵彩色梵天・帝釈天像)、京都国立博物館(興福寺曼荼羅西金堂左方像・右方像)などがある(表1の53~63)。

単独像としては帝釈寺(帝釈天像)、海竜王寺(文殊菩薩像)がある(表1の65~66)。

なお、この時期の着装形式には新たな組み合わせが現れる。形姿を考慮すると戒壇院厨子扉絵を念頭においたと推測される作品が多い。着装もそれに倣うものが多いものの、逸脱するものもある。その組み合わせを整理すると次のとおりである。

- 一. 両者とも長袂衣を着け片方の像が甲、袈裟を着ける(表1の53~59)
- 二. 両者とも長袂衣を着け片方の像が袈裟を着ける(表1の60)
- 三. 両者とも長袂衣を着け片方の像が袈裟を着け、もう一方が甲を着ける(表1の61)

四、両者とも長袂衣と甲と袈裟を着ける（表1の62）

五、片方のみ長袂衣を着け、もう一方が袈裟を着ける（表1の63）

一、二は鎌倉時代以前にもあったが、三、五は新たにあらわれる着装の組み合わせである。このように着装の上では多様化しているといえる。

## 第五章 中近世における像容認識

前章までに述べたとおり、奈良時代の像容に基づいた梵天・帝釈天像の制作は、新たに密教系梵天・帝釈天像の請来された平安時代以降も一部で継承される。さらに、鎌倉時代にいたると、着装自体が多様化し、尊像名との関係が複雑となる。尊像名については、造像当初の尊像名が踏襲されているのか確認できない事例もあり、一部では現代の解釈によって尊名が比定されている例もある。ここではそうした、曖昧な尊像名をもつ例を外し、銘記等によって当初の尊像名が確認できるものを取り上げる。とくに着袈裟という視点から考慮が必要と思われる三例、興福寺の帝釈天像（梵天）・根津美術館の帝釈天像、妙法院二十八部衆像の梵天・帝釈天像、興福寺護法善神像の梵天王・帝釈天像の場合を考察の対象とする。

興福寺・根津美術館の像は、本来興福寺に伝わったものである。像内の墨書銘から長袂衣、甲、袈裟を着ける像が帝釈天、長袂衣を着け

る像が梵天であることが知られる。妙法院梵天・帝釈天像は長袂衣、甲、袈裟を着ける像が帝釈天、長袂衣を着ける像が梵天として伝世している。興福寺護法善神像は長袂衣、袈裟を着ける像が梵天、長袂衣、甲の像が帝釈天と図中に添付の短冊に記されている。

前者二例の着装は奈良時代のもと同じであるが、長袂衣、甲、袈裟を着ける像が帝釈天とされており、尊像名は逆転している。護法善神像は、両者ともに長袂衣を着ける点は同様であるが、一方は着甲せずに袈裟を纏い、他方は着袈裟とせずに甲を着けるといふこれまで取り上げてきた作例と異なっていて、この着装の組み合わせは他例をみない。つまり着袈裟像が梵天で、着甲像を帝釈天としている。着袈裟という視点では、中世において着装と尊像名との関連に若干の混乱が生じることが認められよう。この理由についてはさらなる検討が必要であるが、密教図像においてはしばしば着甲像が帝釈天として規定・表現されていることが一因とも考える。

なお、一点留意しておきたいのは、興福寺・根津美術館の像は、先述のとおり像内墨書銘によって、長袂衣、甲、袈裟を着けた像が帝釈天、長袂衣を着ける像が梵天として造像されたことが判明しているが、興福寺では近似まで長袂衣を着ける像を帝釈天としてきた<sup>10</sup>。となれば、対をなす長袂衣、甲、袈裟を着けた像は、かつて梵天と認識されていたこととなる。この逆転が何時に起こったことかは不明であるが、中世から近世にかけて着袈裟像を梵天に比定することが依然として一部では行われていたと見ることができよう。

また、第三章でも述べたとおり、現在では単独像として伝来する帝釈天像の中には、袈裟を着けず長袂衣のみ、または長袂衣と甲を着装する像も伝わっている。造像当初から単独像であったかは不明ながら、これらはまさしく、奈良時代の帝釈天の着装であるし、仁王経五方諸尊図の帝釈天にも見られる着装である。あるいはこのような作例の存在が、袈裟を着けない像を帝釈天とし、それに対し袈裟を着けた像が梵天であるという認識を促進したかもしれない。





No	所在	作品名	制作技法	長袖	筒袖	甲	袈裟	裙	条帛	その他	不明	備考
31	置 法隆寺伝法堂旧安	帝釈天像	木造	○								
30	龍光院	梵天像	木造	○								
		屏風本尊右方像	木造	○			○					
29	東京国立博物館	帝釈天像	木造	○		○						
		梵天像	木造	○								
28	細見美術館	天部形像	木造	○								
		天部形像	木造	○								
27	東大寺	俱舎曼荼羅右方図	絹本着色	○								
		俱舎曼荼羅左方図	絹本着色	○								
26	秋篠寺	薬師三尊像右方像	木造	○								
		薬師三尊像左方像	木造	○								
25	善水寺	帝釈天像	木造	○								
		梵天像	木造	○								近時まで日光菩薩とされた
24	京都国立博物館	十二天像帝釈天図	絹本着色					○	○	○		
		十二天像梵天図	絹本着色					○	○	○		
23	西大寺	十二天像帝釈天図	絹本着色					○	○	○		
		十二天像梵天図	絹本着色					○	○	○		
22	醍醐寺	帝釈天像	木造					○	○	○		
		帝釈天像	木造					○	○	○		
21	清涼寺	帝釈天像	木造					○	○	○		
		帝釈天像	木造					○	○	○		
20	東寺講堂	梵天像	木造					○	○	○		
		仁王經五方諸尊図帝釈天図	紙本墨画					○	○	○		
18		十卷抄梵天図	紙本墨画					○	○	○		
		十天形像図帝釈天図	紙本墨画					○	○	○		
17		十天形像図梵天図	紙本墨画					○	○	○		
		四種護摩本尊及び眷属画像帝釈天図	紙本墨画					○	○	○		
16		四種護摩本尊及び眷属画像梵天図	紙本墨画					○	○	○		
		四種護摩本尊及び眷属画像帝釈天図	紙本墨画					○	○	○		

No	所在	作品名	制作技法	衣長	袖	甲	袈裟	裙	条帛	その他	不明	備考
51	長福寺	十二天像帝釈天	絹本着色	○								
50	西明寺	十二天像梵天	絹本着色	○								
49	広隆寺	十二天像梵天	絹本着色	○								
48	奈良国立博物館	十二天像帝釈天	絹本着色	○								
47	神護寺	十二天像帝釈天	絹本着色	○								
46	聖衆来迎寺	十二天像帝釈天	絹本着色	○								
45	奈良国立博物館	十二天像帝釈天	絹本着色	○								
44	東寺	十二天像屏風梵天像	絹本着色	○								
43	慈眼庵	天部像(寺伝聖観音)	木造	○								
42	當麻寺	帝釈天像	板絵彩色	○								
41	室生寺	板絵彩色伝帝釈天曼荼羅	板絵彩色	○								
40	孝恩寺	帝釈天像	木造	○								
39	大蔵寺	帝釈天像	木造	○								
38	パークコレクション	帝釈天像	木造	○								
37	常福寺	帝釈天像	木造	○								
36	平等院浄土院	帝釈天像	木造	○								
35	正法寺	帝釈天像	木造	○								
34	法雲寺	帝釈天像	木造	○								
33	護国院	梵天像	木造					○	○			
32	唐招提寺	帝釈天像	木造	○				○	○			
		梵天像	木造	○								

No	所在	作品名	制作技法	長袂	筒袖	甲	袈裟	裙	条帛	その他	不明	備考
66	海竜王寺	文殊菩薩像	木造	○		○	○					
65	帝釈寺	帝釈天像	木造	○			○					
64	東寺二間観音脇侍	観音菩薩・梵天・帝釈天像 梵天像	木造	○								
63	京都国立博物館	興福寺曼荼羅図西金堂右方像	絹本着色	○			○					
62	東福寺	帝釈天像	板絵彩色	○		○	○					
61	興福寺	護法善神像帝釈天図	板絵彩色	○		○	○					
60	東京国立博物館	十六善神像右方図	絹本着色	○			○					
59	藤田美術館	木造八角舍利殿右方図	板絵彩色	○			○					
58	京都国立博物	館興福寺曼荼羅図東金堂右方像	絹本着色	○		○	○					
57	妙法院	二十八部衆像帝釈天像	木造	○			○					
56	興福寺	帝釈天像	木造	○			○					
55	根津美術館	帝釈天像	木造	○			○					
54	東京芸術大学	帝釈天像 (梵天)	木造	○								近時まで寺伝で梵天とされた
53	海住山寺	五重塔扉絵右方像	板絵彩色	○		○	○					
52	瀧山寺	観音菩薩・梵天・帝釈天像 帝釈天像	木造		○	○	○	○	○			

## おわりに

本稿では梵天・帝釈天の着装について、「着袈裟」という視点から考察を試み、奈良時代では袈裟を着ける像が梵天と考えられることを指摘した。しかしながら、中世においては、一部で着装が統一を欠き、着装と尊像名との関連も複雑になることを示した。このことから梵天・帝釈天の尊像名比定には、着甲の有無は無視できないにしても、それ以外に袈裟や持物、制作年代なども考慮する必要があるのではないか考える。

梵天・帝釈天の片方の像が袈裟を着ける意味については本論では考察しえていない。従来は、梵釈二像のうち、古代インドで戦闘神であった出自を踏まえ、着甲像を帝釈天に比定することが有力であったが、本稿では、着眼点を変え、二像のうち袈裟を着ける像を梵天とする見解を示した。そもそも袈裟は出家した僧侶の纏うもので、「伝法衣」の言葉もある通り、しばしば師から弟子への伝法の証として伝襲されることもあった。奈良時代の『東大寺献物帳』（「国家珍宝帳」）では、聖武天皇の「袈裟」が目録の筆頭に記される通り、仏教において袈裟のもつ重要性はとくに認識されていたと考えられる。教えを重視する仏教においては、梵釈二像のうち、そもそも古代インドで宇宙の根本原理フラフマー（梵）を神格化したとされる梵天が袈裟を纏うことの方が、帝釈天が甲を着することに比べ、より重要なこととして認識されていたのではなからうか。像容が考案されたと考えられる隋唐の時

代の仏教事情を調べる必要を感じており、今後あらためて考察を行う機会を持ちたい。

## 【注】

- (1) 『東大寺大鏡 第二冊』五頁 大塚工藝社 昭和八年
- (2) 井上正「解説」〔奈良六大寺大観 東大寺 二〕岩波書店 一九六八年
- (3) 佐和隆研編『仏像図典』吉川弘文館 一九六二年
- (4) 関根俊一「日本の美術 第三七五号 梵天・帝釈天像」至文堂 一九九七年
- (5) 上原昭一「解説」〔奈良六大寺大観 東大寺 二〕岩波書店 一九六八年
- (6) 東大寺および唐招提寺の梵釈像の尊像名の逆転に言及している美術全集として次のものがあげられる。
  - ・『日本美術全集 第4巻 天平の美術\* 南都七大寺』学習研究社 一九七七年
  - ・『名宝日本の美術3 東大寺』小学館 一九八〇年
  - ・『名宝日本の美術7 唐招提寺』小学館 一九八〇年
  - ・『日本美術全集 第4巻 東大寺と平城京 奈良の建築・彫刻』講談社 一九九〇年
  - ・『日本美術全集 第3巻 奈良時代 東大寺・正倉院と興福寺』小学館 二〇一三年
- (7) 奥健夫「東大寺法華堂八角二重壇小考」〔佛教藝術三〇六号〕二〇〇九年
- (8) 国書刊行会編『仏像体系6 写真で見る仏像篇2』一九八三年
- (9) 十二天像は密教図像に基づくものとして考察の対象外としたが、鎌倉時代の十二天像における帝釈天は平安時代の裙、条帛という姿から、長袂

衣の姿や、長袂衣に袈裟を着ける姿も見られるようになる。

(10) 久野健編『仏像集成5 日本の仏像(奈良1)』一九九四年

### 【付記】

本稿は筆者が平成三〇年に奈良大学文学部文化財学科に提出した卒業論文の一部を加筆訂正したものである。執筆に際しては、奈良大学の関根俊一教授、原口志津子教授より御指導・御助言を頂いた。末尾ながら記して謝意を表します。

### 【図版出典】

- 図1 『日本の美術 第三七五号 梵天・帝釈天像』第4図 至文堂一九九七年  
 図2 同右 第5図 至文堂一九九七年  
 図3 『佛教圖像集古 戒壇院扉繪』所収  
 図4 同右  
 図5 『日本の美術 第三七五号 梵天・帝釈天像』第8図 至文堂一九九七年  
 図6 同右 第9図 至文堂一九九七年  
 図7 同右 第2図 至文堂一九九七年  
 図8 同右 第3図 至文堂一九九七年  
 図9 同右 第6図 至文堂一九九七年  
 図10 同右 第7図 至文堂一九九七年  
 図11 同右 第14図 至文堂一九九七年  
 図12 同右 第65図 至文堂一九九七年